

# 泉鏡花の「高野聖」の文章について(一)

植村邦正

## The Characteristics of Expressions in Kyôka's Works (1)

Kunimasa UEMURA

### まえがき

この作品は説教師の老僧(高野聖)が、たまたま泊り合わせた若い男に、自分の修行僧時代に旅で出会った怪奇な出来事を寝物語に聞かせる形式になっている。

相手が若い男だという気易さから「一番野面<sup>のづら</sup>でやっつけよう」といった、ぶっきら棒な言い方をしたり、僧の身だてらに図に乗って女の話<sup>い</sup>をべらべらはじめる。次の瞬間、ふと我にかえて、「お話し申すもおそれ多いが」とか、「いや、冷汗が流れますて」とか、自らを反省することばを出すという具合に、語り<sup>い</sup>が時に奔放に大胆に、時に慎しみ深さを失わぬ節度を見せ、相手に不快感を与えない。

さらに力強く表現したいところでは、漢語を使い、文語調を交え、情景が急迫してくると、畳みかけるような筆勢に変わり、中止法を多用してテンポを早め、相手をして応接に違<sup>いとま</sup>あらしめない。

あるいは省略法によって興味を倍加し、臙化法によってぼかした言い方をし、突き放した表現法によってかえて強い印象を相手に与える。また相手が早く話しの続きを知りたいと迫ってくると見るや、途端<sup>とぼ</sup>に恍けて長々と別の話しをはじめるといふ風に、相手をじらしにじらした挙句の果てに、やっと続きを語るというやり方をする。これなど興味への導入の見事さというべきである。

若い男に向かい、「その明りを搔き立ってもらいたい、暗いと怪しからぬ話じゃ」というのは、いかにも怪奇談にふさわしい場面設定を考えているのである。

これは不用意に出したことばかなと思って見て行くと、それが必ずと言ってよい程、後の話しの伏線となっている。

また特に妖艶な女性美の描写に至っては、時に簡素な表現の中に、時に纏綿たる筆遣いの中に言うに言われぬ持味を出している。

鏡花の文章は非常に難解だといわれている。このことは会話は別にして「語り」の文においても同様である。省略があり飛躍があり、急湍のごときリズム感のある文があるかと思うと、反対に主語・述語・修飾語などの文の成分に、それぞれさらに幾つもの修飾語が付くという複雑な構文が出て来る。加えて彼独得の語句が使用されていて読者の理解を妨げるためである。何度も何度も読みかえして、文章の本筋を掴むことが重要になってくる所以である。

以上の諸点について、幾つかの特徴を項目別に取上げて考察してみようと思う。

[注]以下の例文において、各文頭の数字は旺文社文庫本のページ数を示す。他の作品の場合は、例文の末尾に出典を( )内に示す。

## 文語の混用

鏡花はもともと流麗な美文調を身につけた人であるが、明治20年代二葉亭四迷・山田美妙等にはじまる言文一致運動が漸く小説界に浸透し、鏡花としても、自分なりに苦心をはらったあとが見える。その結果、口語体として一応の完成を見たのが、「高野聖」と「歌行燈」である。しかし、口語化がはじまって日なお浅い明治30年代であるから、彼の作品にもまだまだ文語調が残っている。

それでは、この作品の会話文体を基盤とした「語り」の中に、現代語から眺めて文語的と思われることばがどのように混入しているであろうか。

### (1) 文語形容詞および助動詞「なり」

9 ことにこのごろの夜は長し、……一晩の泊りが気になってならないくらい……。

13 きまりも悪し、もじもじと聞くとの。

32 保つにむずかしい戎でもなし、私はただうなづくばかり。

8 もとより二人ばかりなり、知己にはそれからなつたのだが、……。

47 ことに崖を、上の方へ、いい塩梅にうねつた様子が、飛んだものに持って来いなり、およそこのくらいな胴中の長虫がと思うと、……。

「飛んだものに持って来いなり」は、「松の木の枝ぶりが、とんでもないもの（蛇）にまことによく似ているので」の意。

以上の傍線の語はみな終止形であるが、単なる終止ではなく、それらの活用語のついた前件が後件の原因・理由を示す場合に用いたもの。この場合は「……ので」と意識する。

68 時が時なり、心も心。

これは事柄を並列するもので、「心も心」はあとに「なり」が省かれている。この場合は「…であるし」と意識すればよい。

12 どうしてその時分じゃからというて、めつたに人通りのない道、朝顔の咲いているうちに煙が立つ道理もなし、床几の前には冷たそうな小流があつたから手桶の水を汲もうとしてちよいと気がついた。

この例文は、形式上文の切れるところに「なし」を用いているが、意味の上からは、「手桶の水を汲もうとして」にかかり、原因・理由を示す場合と考えてよさそうである。「朝顔の咲いて……道理もなし」は、「早朝から薪をくべて、（客に飲ませるための）湯が沸いているはずはない」の意。

### (2) 「ごとく」「ごとくに」

7 腰掛の隅に頭を垂れて、死灰のごとくひかえたから……。

10 その日も期したるごとく、……提灯、印傘の堤を築き……。

30 口を開いていること旧の如し。

39 糸をさばくがごとくまっ白にひるがえって。

29 鶏冠のごとくになって……。

50 脚から根をつけたごとくにぬくと立っていて……。

53 月下の美女の姿を差しのぞくがごとく、……。

用例は「ごとく」「ごとくに」が多く、「如し」は例外的な用法。

(3) 仮定条件の「ば」

9 差し支えがなくば御僧おんごと御一所に。

よろしくばそれへ、……。

14 欲しくば買いな。

29 腰がなくば暖簾のれんを立てたように畳まれそうな、……。

37 よろしくば草履とりかとお取交え申しましょう。

古風な、ややかしこまった言い方。形容詞についた例が多い。9 は補助形容詞についている例。

36 ならば手柄でござんす。

27 まずこれならば猿の餌食になっても、それは一思いに死なれるからと、……。

68 地体並みのものならば……。

36は上に具体的な内容を示すことば、例えば「それ」などの語が省かれた形。これは魔性の女が下男おやじの親仁に答えることばの中にあり、江戸の滑稽本・洒落本の話しことばや、歌舞伎・講釈にもよく使われる慣用句。それを受けた明治文学にも散見するが、威厳を保つときとか、気取ったとき、かしこまったときに用いる。27・68も話しことばとしてはやや古風な言い方に属する。現代語では「……なら」ということが多い。

(4) 「るる」「らるる」

10 鱗が黄金造こがねづくりであるかと思わる艶を持った……。

36 導かるままに壁について、……。

66 この谷川の流こどもれに沿うて行きさえすれば、どれほど遠くても里に出らる、……。

75 小児こどもと一所に山に留まったのは御坊が見らるるとおり、あの白痴ばかにつきそって行き届いた世話も見らるるとおり、……。

作品中の使用頻度をみると、「れる」「られる」の方が多いが、ときどきこの形で用いている。10は自発、36は受身、66は可能、75はともに尊敬の意。なお66は意味上では一旦終止するところに用いていると思われる。

(5) 「なる」「たる」

10 焔の大いなる、……。

46 いかなることにもいざとなれば驚くに足らぬという……。

56 膝なる手拭の端を口にあてた。

68 一尾の鯉びの、鱗は金色うるこ こんじきなる、……。

10は形容動詞の連体形。46は現代語では連体詞と考えられるもの。56は「にある」の意。68は形容動詞の連体形とも、名詞に助動詞のついたものとも考えられる。

40 月はなはんぶくお半腹のその累々たる巖を照らすばかり。

54 婦人おんな そばの傍へその便々たる腹を持って来たが、……。

65 ものをいうことさえ忘れるような気がするというはなんたること！

67 地を貫く勢い、堂々たる有様じゃ、……。

10 その日も期したるごとく……。

72 兎も蛇もみな嬢さまに谷川の水を浴びせられて畜生にされたる輩やから！

40・54・65・67は連体詞、10・72は完了の助動詞「たり」の連体詞。これらの用いられている場

を考え合わせると、強い表現を必要とするところに使っているようである。「たる」は音感の上から強いひびきを持っているからである。

(6) 「されば」

35 さればさの<sup>とんま</sup>、頼馬で間の抜けたというのはあのことかい。

40 さればこそ<sup>やまびる おおやぶ</sup>山蛭の大藪へ入ろうという少し前からその音を。

75 さればかような美女が片田舎に生まれたのも国が世がわり、代がわりの前兆であろうと、……。

35は相手のことばを受けて応答するときの古風な言い方。「さ」「の」は感動助詞。40・75は接続詞と感動詞の両方の意味をあわせ持っている。

(7) 「ならぬが」など

16 田圃<sup>たんぼ</sup>が湖にならぬが不思議で……。

人の手で並べたに違いはない。

22 聞いたにも見たのにも変わりはない、……。

25 気がつかぬであった。

22 木の根をめぐって参ったがここのことで。

65 ものをいうことさえ忘れるような気がするというはなんたること！

69 あの孤家の婦人というは、旧な、これも私には何かの縁があった、……。

上例16は別段文語調というには当たらないかも知れないが、現代語では普通活用語の連体形の次に準体助詞「の」とか、形式名詞「事」などを入れるところ。すなわち、25は「事」、その他は「の」を入れると落ちつく。しかし、この用例を見ると、音調の上からはない方がなめらかで、そのため鏡花がわざと省いたのかも知れない。もっともこの言い方は江戸語をはじめ明治初期から中期へかけての作品には多出する。

(8) その他

9 後は名にしおう北国空、……。

27 どの道死ぬるものなら一足でも前へ進んで……。

40 乳の端もほの見ゆる、膨らかな胸を……。

67 千筋に乱るる水……。

75 らめば美しい木の実も落つる、袖をかざせば雨も降るなり、眉を開けば風も吸くぞよ。

これは魔性の女の神通力を示す神秘的<sup>おやし</sup>世界を親仁が修行僧に語るところで、美文調がよいと考えたものだろう。「落つる」は連体形止めで余韻を持たせ、「なり」はこのままで詠嘆的意味を持たせたもの。

46 馴々しくて犯しやすからぬ品のいい、……。

52 たちまち犯すべからざる者になったから、……。

この46・52も魔性の女の威厳を示すため力強く文語体にしたもの。

67 汚らわしい欲のあればこそうな上に躊躇するわ、……。

66 いささ小川の水なりとも、どこぞで白桃の花が流れるのをごらんになったら……。

「いささ」は「いささかの」という意の接頭語。

72 あわれその時あの婦人が墓にまつわれたのも、……思い出して、私はひしひしと胸に当たった。

## ことばの省略

鏡花の文章に省略の多いことは定評のあるところであるが、それが他面含蓄のある文章になっている原因でもある。表現を腹八分にとめておくことは、後の二分を聞き手なり、読者なりの判断に任せることになる。ことばをかえて言えば、語り手・作者の表現活動に聞き手・読者が参画することになり、聞き手・読者は創作活動の一部を担当したつもりになってその文の奥にかくされたものを自分なりに補って解釈することになる。これが含蓄ある文・会話という事にもなる。

### (1)文の結び語の省略

普通、文は活用語で終わるものが多い。口語においては「る」「た」「だ」で終わるものが多い。

。「る」で終わるのは、四段（五段）活用動詞ではラ行だけであるが、その他の動詞および動詞型助動詞はみな「る」でおわる。

。形容動詞および形容動詞型の助動詞はみな「だ」でおわる。

。過去の助動詞は「た」あるいは「だ」でおわる。

こうなると、文語では複雑であった文の結びが、口語では極めて単調で、特に「た」「だ」は語感が強く、文の終わりがはっきりし過ぎ、きれぎれの感じを与えることになる。それらの弊を救うために明治20年代以後、名詞止め、副詞止め、助詞止め等が考えられて来た。

それでは明治33年に出された「高野聖」の実際はどうなっているか。

#### ① 体言止め

**10** 白く（雪が）積った中を、道の程八町ばかりで、とある軒下にたどり着いたのが名指の香取屋（ジャ）。

**19** 本街道よりもっと幅の広い、なだらかな一筋道（デアル）。

**45** 不意をうたれたように叫んで身悶えしたのは婦人（ダ）。

**68** 後 暗いので吃驚して見ると、閻王の使いではない、これが親仁（ダ）。

**17** 前にも申す、その図面をな、ここでも開けて見ようとしていた処（ジャ）。

**50** 大きな鼻面をこっちへねじ向けて、しきりに私らがいる方を見る様子（ジャ）。

**10・19・45・68**は名詞止め、**17・50**は形式名詞止め。（ ）の中のことばは、省略されたと思われる語を仮りに補った。以下についても同様。上例はすべて断定の助動詞「だ」「である」「じゃ」のいずれかが略された例である。他にもこの類は多い。

**30** 私は驚いた、この生命に別条はないが、先方さまの形相（ト言ッたら形容ノシヨウガナイクライダ）。いや、大別条（ガアルトイウベキダ）。

**63** 紫陽花の咲いている花の下あたりで、鳥の羽ばたきする音（ガスル）。

**74** 医者も我を折って腕組みをして、ハッという溜息（ヲツイタ）。

**38** もっともこれを渡り果てるとたちまち流れの音が耳に激した、それまでには余程の閨（ガアル。）

**73** ベそをかいても、兄者が泣くなといわしたと、耐えていた心の内（ハドンナデアロウ）。

**76** 親仁は鯉を提げたまま見向きもしないで、山路の方（へ登ッテ行ッタ）。

16「おいおい、松本へ出る道はこっちだよ」といって無造作にまた五六歩(歩イタ)。

47頭と尾を草に隠して、月あかりに歴然とそれ(ト分カル)。

30・63・74は名詞止め、38・73・76は形式名詞止め、16は数詞止め、47は代名詞止め。省略されたことばは、用言を中心とした述語が多い。この類のものも非常に多い。

② 用言の語幹止めその他

28危ないとも思わずにずっとかかる、少しぐらぐらとしたが難なく越した、向こうからまた坂じゃ、今度は上りさ、ご苦労千万(ナコトヨ)。

これは形容動詞の語幹止めだが、ユーモアたっぷりに自分に向かって言い慰めているのである。

29馬がいるようでは左も右も人里に縁があると、これがために気が勇んで、ええやっと今一揉

これはサ変動詞の語幹と見れば「…シテ坂ヲ上ツタ」、数詞の副詞的用法と見れば「…カラダヲモンデ坂ヲ上ツタ」などの語の省略となる。

58白痴はふらふらと両手をついて、ぜんまいが切れたようにながっくり一礼(シタ)。

70手先へ柔らかな掌が障ると、第一番に次作兄いという若いの(りゅうまちす)が全快(スル)。

58・70はサ変動詞の語幹止め。70は魔性の女の術をほどこしている場面である。

9 慎み深そうな、打見よりは気の軽い(人ダ)。

14話が、話じゃからそこはよろしく(ゴ推察願イタイ)。

30立顕われたのは小造の美しい、声も清しい、ものやさしい(女デアル)。

9・30は形容詞の連体形、14は連用形である。

③ 副詞止め

16地の上へ流れるのが、……道のまん中に流れ出してあたりは一面(=水ビタシダ)。

9 差し支えがなくば御僧と御一所に(トメテイタダキタイ)。

この「一面(に)」「御一所に」は一応副詞と考えた。

21(蛇が)胴中を乾かして、尾も首も見えぬが、ぬたり!(ト横タワル)。

これは感嘆符がついており、省略と見るより、副詞の感動詞的表現と見るべきか。

35おらここに頑張って待っとるに、と横様に縁にのさり(ト腰ヲオロシタ)。

少年は、うむといったが、ぐたりとしてまた臍をくりくりくり(ト搔イテイル)。

46枝から枝を伝うと見えて、見上げるように高い木の、やがて梢まで、かさかさがさり(ト駈ケ上ガッタ)。

48それがさ、一件じゃから耐らぬて、……わッという引跨いで腰をどさり(トオロシタ)。

51あの宙へ下げている手をおおるように、はらりはらり(ト動カシタ)。

26やっぱり幾ツということもない蛭の皮じゃ。これはと思う、右も、左も、前の枝も、なんのことはないまるで充滿(クツイテイル)。

38墓はのさのさとまた草を分けて入った、婦人はむこうへずいと(立ツ)。

29幽霊の手つきで、片手を宙にぶらり(ト下ゲテイル)。

26黒い虫が泳ぐ、それが代がわりの世界であろうと、ぼんやり(ト考エタ)。

45鼠色の小坊主(猿)が……背後から婦人の背中へびったり(トツカマッタ)。

61 静かに大跨<sup>おおまた</sup>に歩行<sup>ある</sup>いたのが、寂としているから能く（聞コエタ）。

以上の用例を見ると、ほとんどすべて擬声語・擬態語またはその疊語から出来た副詞であることが分かる。この類の副詞はあとに「と」を付けなくても使われるが、古い形は「と」があると思うので、それをつけて省略部分を補った。この省略法で文を終止すると一種の余韻を持つことになり、擬声語・擬態語によって聞き手の脳裡に自由に、時には拡大して情景が想像され、感嘆符をつけなくても、一種の感動表現となる効果を持つようである。副詞止めであるから、あとに動詞およびそれに準ずる述語すなわち被修飾語が省かれているのは当然である。

#### ④ 助詞止め

13 いやどれもこれも克明<sup>こくめい</sup>で、分別のありそうな顔をして（イル）。

21 顔の色もその蛇のようになったろう、と目をふさいだく<sup>く</sup>らい（ダッタ）。

南無阿弥陀仏、今でも悚然<sup>ぞつ</sup>とすると額に手を（当テタ）。

「額に手を当てる」は、喜ぶときとか、考え込むときなどいろいろの場合に用いるが、ここでは神仏に祈念するときのしぐさである。「額に手をあてて念じりてをり」（源氏・玉鬘）、「ひたいに手を当てて、信をなしつつききるたり」（大鏡）などの例がある。

22 首筋を取って引き立てるようにして峠の方へ（登ッテ行ッタ）。

描いてある道はただ栗<sup>い</sup>の毬の上へ赤い筋が引<sup>い</sup>張<sup>が</sup>ってあるばかり（ダ）。

39 目のあたり近いのはゆるぎ糸をさばくがごとくまっ白にひるがえ<sup>ま</sup>って（流レテイル）。

40 山蛭の大藪へ入ろうという少し前からその音を（聞イタ）。

月はな<sup>はんぶく</sup>お半腹のその累々たる巖を照らすばかり（デアル）。

71 蜘蛛の巣のように評判が八方へ（ヒロガッタ）。

74 この洪水で生残ったのは、不思議にも娘と小兒<sup>こども</sup>と……この親仁<sup>おやじ</sup>ばかり（デアル）。

以上は大体、動詞・補助動詞および助動詞が省略されたものである。

18 御坊さまも血気にはやって近道をしてはなりましねえぞ、草臥<sup>くたび</sup>れて野宿をしてからがここを行かっしゃるよりはましでござるに。

23 程なく急に風が冷たくなった理由を会得することができた。というのは目の前に大森林があらわれたので。

32 ああ、お泊め申しましよう、ちょうど炊<sup>た</sup>いてあげますほどお米もございますから。

52 会心の笑<sup>えみ</sup>をもらして婦人は蘆毛<sup>おんな</sup>の方を見た、およそ耐<sup>た</sup>らなく可笑<sup>おか</sup>しいといった風采<sup>とりなり</sup>で。

18 以下は省略ではなく、倒置法を用いたために、助詞止めの形になったのである。

15 以前の薬売がすたすたやってきて追いついたが、（改行）別に言葉も交さず、またものをいったからというて、返事をする気はこっちにもない。

これは助詞止めではあるが、普通の助詞止めとは違って、鏡花独得の興味への導入のためのもので、ここで一旦文を切り、さらに行を改めて書き出している。これは犬猿の仲の二人が出会うのだから何が起こるか期待させ、さてと次の「別に言葉も……」とつづける。この場合は期待感<sup>は</sup>裏切られるのだが。

40 二の腕の処を洗っている<sup>と</sup>。（改行）「あれ、貴僧<sup>あなた</sup>、そんな行儀のいいことをしていらしてはお召<sup>めし</sup>が濡れます、……」（ト女ガ語りカケタ）。

これは修行僧が魔性の女と水浴をしているところ。聞き手が次に何が起こるか聞き耳を立てて待ち構えているのを知って意地悪く「と」で切ったのである。

52手をしなやかに空<sup>そら</sup>ぎまにして、二三度鬚<sup>たてがみ</sup>をなでたが、(改行)大きな鼻頭<sup>はなづら</sup>の正面にすくりに立った。

この場面は、魔性の女が、馬(実は女のために変身させられた薬売の男)が動かないため、自ら裸身となって術をかける所。従って聞き手の期待感を増幅させるため、これも一旦助詞止めにしたのである。

以上の助詞止めの主な理由を総括すると、

- 動詞、助動詞の「だ」「である」を省略し、結びに変化を持たせるため
- 倒置法にするため
- 聞き手の興味を後へつなぐため

⑤ 助動詞の連用形止め・連体形止めなど

8 ばらばらと海苔<sup>ちりし</sup>がかかった、五目飯<sup>ごもくい</sup>の下等<sup>したう</sup>なので。

12 けたいの悪い、ねじねじした厭<sup>わかいもの</sup>な壮<sup>むすこ</sup>俊<sup>とよ</sup>で。

16 なかなか馬<sup>うま</sup>などが歩<sup>ある</sup>行<sup>ゆく</sup>かれる訳<sup>わけ</sup>のものではないので。

22 木の根<sup>ね</sup>をめぐって参<sup>まゐ</sup>ったがここのこと<sup>こと</sup>で。

23 ざっというすさまじい音<sup>ね</sup>で。

26 いや、まったくのこと<sup>こと</sup>で。

37 浮世<sup>うきよ</sup>はどこにあるか十三夜<sup>じゅうさんや</sup>で。

74 送<sup>はなつ</sup>ってきたのが孤家<sup>こけ</sup>で。

以上の「で」は断定の助動詞(だ)の連用形、あるいは助動詞「である」の下略とみることもできる。この「で」止めは、三遊亭円朝・二葉亭四迷以来会話の中に多く見られ、後には地の文にも使われ、明治30年代には一般化し、島崎藤村・小栗風葉・山田美妙など盛んに用いている。

11 後<sup>のち</sup>で聞くと宗門<sup>しゅうもん</sup>名譽<sup>めいよ</sup>の説教師<sup>せつこうし</sup>で、六明寺<sup>りくみん</sup>の宗朝<sup>しゅうちよう</sup>という大和尚<sup>だいおしょう</sup>であったそうな。

42 もっとも質<sup>たち</sup>の佳<sup>い</sup>い水<sup>みづ</sup>は柔<sup>な</sup>らかじゃそうな。

61 おやおやさっきの騒<sup>さわ</sup>ぎで櫛<sup>くし</sup>を落<sup>お</sup>としたそうな。

70 娘<sup>むすめ</sup>が来て……肩<sup>かた</sup>を押<sup>お</sup>えていると、我慢<sup>まんまん</sup>ができるといったようなわけであったそうな。

「そうな」は「そうだ」という助動詞の連体形であるが、江戸語以来この連体形が終止形のようにして用いられている。これは「そうだ」より「そうな」の方が柔らかい響きを持つことにもよろう。現代語では活用語の連体形(終止形とも)につく場合は伝聞の意味が多いが、上例の61は「らしい」という推量の意に用いている。他はみな伝聞の意である。

15 弓形<sup>ゆみなり</sup>でまるで土<sup>つち</sup>で太鼓橋<sup>たいこはし</sup>がかかっているような。

38 まっ白<sup>しろ</sup>なのが暗<sup>く</sup>まぎれ、歩<sup>ある</sup>行<sup>ゆく</sup>くと霜<sup>しも</sup>が消<sup>き</sup>えていくような。

67 その膚<sup>はだ</sup>が粉<sup>こな</sup>に碎<sup>くだ</sup>けて、花片<sup>はなひら</sup>が散<sup>ち</sup>り込むような。

39 しだいに大きく水<sup>みづ</sup>にひたったのはただ小山<sup>こやま</sup>のよう。

69 この医者<sup>いしや</sup>の娘<sup>むすめ</sup>で、生まれると玉<sup>たま</sup>のよう。

この「ような」は「ようだ」という様態の助動詞の連体形。その使用法は「そうだ」と同じ



く連体形で終止するものが多い。活用語の連体形(終止形とも)につく。「よう」は「ようだ」の下略とも、形式名詞の「よう」とも考えられる。

## (2) 文中語の省略

10雪は小止<sup>おやみ</sup>なく、……宵<sup>すじ</sup>ながら門を鎖した敦賀の通りはひっそりして一条二条縦横に(走ッテオリ)。辻の角は広々と(シテ)、(雪ガ)白く積った中を、……とある軒下にたどり着いたのが名指<sup>なざし</sup>の香取屋(ジャ)。

11天井は低いが、梁<sup>うつぱり</sup>は丸太で二抱<sup>ふたかかえ</sup>もあろう、(ソレガ)屋の棟から斜めに渡って座敷の果て<sup>ひさし</sup>の廂<sup>あたま</sup>の処では天窓<sup>やづくり</sup>につかえそうになっている、がんじょうな屋造(デ)、…。

13万金丹の下廻り<sup>したまわ</sup>と来た日には、桐油合羽<sup>とうゆかつば</sup>を小さく畳んでこいつを真田紐<sup>さなだひも</sup>で右の包につけるか、(アルイハ)小弁慶<sup>こべんけい</sup>の木綿<sup>こもりがさ</sup>の蝠蝠傘<sup>のれん</sup>を一本(持ッテイル)。(コレガ)おきまりだね。

29腰がなくば(支エノナイ)暖簾<sup>のれん</sup>を立てたように(クタクタト)畳まれそうな(男デ)、年紀<sup>とし</sup>がそれでいて二十二三(=見え)、口をあんぐりやった上唇で巻き込めよう、(ソナ)鼻<sup>な</sup>の低さ<sup>でびたい</sup>(デ)、(シカモ)出額<sup>でぶたい</sup>(デアル)。

「巻き込めよう」の「よう」は可能・推量の助動詞。「よう」のあとに読点が打ってはあるが、「鼻」にかかる連体形と考えられる。普通その連体形は一般名詞にはあまりつかず、現代語では一部の形式体言につくぐらいである。他の作品に次の用例がある。

。お前の両親に対しては、どうしてもその味を知らせよう手段<sup>う</sup>がなかった。(夜行巡査五)

43(私ハ)足を水の中に投げ出したから落ちたと思う途端に、女の手<sup>うしろ</sup>が背後から肩越しに(私ノ)胸をおさえたので(私ハソレニ)しっかりつかまった。

これは修行僧が魔性の女と水浴する場面の描写である。

53その時裏の山(ヤ)、向こうの峰(ノ)、左右前後にすくすくとあるのが、一ツ一ツ嘴<sup>くちばし</sup>を向け、頭をもたげて、この一落<sup>らく</sup>の別天地(=立ッ)、……月下の美女の姿を差しのぞくがごとく(見え)。(タメニ)陰々として深山の気がこもってきた。

これは、魔性の女のため馬と化せられた男が、一步も動かぬため、女が一糸もまともぬ素裸になって術をかけ、言うことをきかせようとするところ。その神秘的な女体を見ようとして、深山の木々までが固唾を呑んで待ち受ける情景。「嘴を向け、頭をもたげ」とあるのは、木々に托して鳥獣に化せられた男達の注視するさまを暗にほめかしている。

39自分たちが立った側は、かえってこっちの山の裾が水に迫って、ちょうど切穴<sup>きりあな</sup>の形になって、そこへこの石<sup>は</sup>を嵌めたような詠<sup>あつらえ</sup>(=ナッテイル)。川上も下流も見えぬが、向こうのあの岩山<sup>つづらおり</sup>、(サラニ)九十九折のような形(ノ坂道ガアリ)、(川ノ)流れは五尺、三尺、一間ばかりずっと上流の方が段々遠く、(ソレガ)飛々に岩をかがったように隠見して、いずれも月光を浴びた、銀<sup>しろい</sup>の鎧<sup>よろい</sup>の姿をして、目<sup>ま</sup>のあたり近いのはゆるぎ糸をさばいたようにまっ白にひるがえって(流レテイル)。

「ゆるぎ糸」は機織のゆるんだ糸筋、「さばく」は乱れたのを整える意。

## 特殊なことば

10潜<sup>くぐり</sup>抜ける隙<sup>すき</sup>もあらなく旅人を取囲んで、……。

江戸中期に、「急<sup>せ</sup>く事はあらない」(心中宵庚申九)、「首もこはいものではあらない」(おあ

ん物語)という用例がある。これは終止形であるが、この「ならない」を活用させて、「あらくなく」という連用形にして用いたものか、あるいは、古語の「あらくなく」の「なく」を助動詞「ない」の連用形と類推違いをしたものか、いずれにしても無理な使い方ようである。

12おそろしい悪い病が流行<sup>はや</sup>って、先に通った辻などという村は、から一面に石灰だらけじゃあるまいか。

17十三年前の大水の時、から一面に野良になりましたよ、……。

この12・17の「から」は、「全く」とか、「すべて」とかいう意を持つ接頭語。「から、意気地も、だらしも有りませぬやね」(日本橋六十六)、「から、だらしは無いけれど、……」(日本橋四十七)という用い方をしているところもあり、これなど副詞のように扱っていると思われる。また「から一概に」(洒落本・南閩雑話)、「から一散に」(雑俳・柳筥一)という語もある。すべて下の「一面に」「一概に」「一散に」「だらし」「意気地」という副詞や体言にかかる接頭語である。

20まるで人が通いそうでない上に、恐ろしいのは、蛇で、両方<sup>くまわら</sup>の叢に尾と頭とを突っ込んで、のたりと橋を渡しているではあるまいか。

これは「橋を渡したように蛇が道に横たわっている」の意。65に「蛇の橋も幸いになし」とあるのも同意。

12大急ぎで歩いたから咽<sup>のど</sup>が渴<sup>かわ</sup>いてしょうがあるまい、さっそく茶を飲もうと思うたが、まだ湯が沸いておらぬという。

これは、「語り」つまり一種の会話であるから、聞き手(この場合は同宿の若い男)の同意を求めるため、「……ないだろう、ね、そうだろう」と語尾を上げた発音で話しかける言い方。

36背後から親仁が見るように思ったが、導<sup>うしろ</sup>かるるままに壁<sup>おやじ</sup>について、彼の紫陽花のある方ではない。やがて背戸と思ふ処で左に馬小屋を見た。

これなど、語りか会話でなければ用いない言い方。「あの紫陽花の咲いている表の方でなく、背戸の方へ歩いて行った」という意。

28酔<sup>す</sup>をぶちまけても分る氣遣<sup>きづかい</sup>はあるまい。

「普通なら酔をぶちあけて融かしたら、何か酔にはとけない痕跡があらわれて分るものだが、この場合はそんなことをしても金輪際分る氣づかいはあるまい」の意。

42それがさ、骨<sup>とこ</sup>に透<sup>とお</sup>って冷たいかというそうではなかった。暑い時分じゃが、理窟をいうところではあるまい。

「暑い時分で水がぬるんでいるせいもあるだろうが、理窟をいうと、暑さのためだけで、こうまで程よい水のはずはあるまい」の意。

56それもさ、刻んだのではないで、一本三ツ切にしたろうという握<sup>にぎりぶと</sup>太<sup>よこぐわ</sup>なのを横銜えにしてやらかすのじゃ、……なるほどこの少年はこれである

これは白痴の少年が老沢庵<sup>ひね</sup>をかじっているところ。「なるほどこの少年なら、この沢庵をかじるのが好きであろう」の意。これが伏線となって、73には、幼年時代食事の時<sup>は</sup>隅の方へ引っ込んで沢庵ばかりかじっている所が親仁の口から話されるのである。

20美濃の蓮大寺の本堂の床下まで吹抜けの風穴があるということを年経てから聞きましたが、なかなかそこどころの沙汰ではない。

「沙汰」は噂、風説の意。「そこ」は風穴の意。意識すれば、「噂のあるそこどころの状態ではない」の意。「どころ」は対比的に強調・否定する場合に用いることば。

62我ともなく鐘の音の聞こえるのを心頼みにして、今鳴るか、もう鳴るか、はて時刻はたっぶり経ったものをと、怪しんだが、やがて気がついて、こういう処じゃ山寺どころではないと思うと、にわかになんか心細くなった。

「こういう処」とは、周辺に家など全くない深山の孤家の意。山寺どころではないとは、山寺などのあるどころか、他に家一軒とてない一従って鐘のなるはずはないの意。「やがて気がついて」とあるのは、57に「たんと朝寐を遊ばしても鐘は聞こえず、鶏も鳴きません、犬だっておりません……」という女の話の思い出したのである。

57そんなにごさいませぬければこうやってお話をなすってくださいまし、……。

食事のあと、婦人が若い修行僧に向かって話し相手をしてくれるように頼むところ。「そんなにお疲れでございませぬでしたら」の意。こういう略した言い方は、25に「ともはや」ということばが出ている。これは「なんともはや」の上略。他の作品にも、「次第であるから」（眉かくし。二）とあるが、これは「そんな次第であるから」の上略。

61寝ようちゃあ、寝ようちゃあ。

白痴の男がねむくなって、魔性の女に訴えるところ。これは文末について詠嘆の気持をあらわす感動助詞と考えられる。他の作品に次のような例がある。「権現様へ御代参、一文やっ下されチャ」（東海道中膝栗毛。初編）、「お早うおざいますチャ」（同上・後編上）。前例は箱根の子供の話、後例は茶屋女の話の中に出て来る。「何をいってもわらわれべえとて、語るべえ事をかたられねえちゃあノウきさん」（洒落本・道中粹語録）。

「ちゃあ」は「ちゃ」からできたと思われる。なお、「ちゃあ」は現在、福井・山梨・高知の各県でも方言として使われているという。「あきらめておるんですちゃあ」（福井）、「用がすんだら来てくれちゃあ」（山梨）、「早うお出でなさいちゃあ」（高知）など。これは私見であるが、「ちゃあ」は「といえば」→「てば」→「ッてば」→「ては」→「ちゃ」→「ちゃあ」となったのかも。こう考えると、自分の意向にすぐさま応じない相手に対するいらだたしさを含んだ感動的表現とみて、61の場合にぴったりすると思うがどうか。

43その明りを掻き立ってもらいたい。

これは普通には「掻き立てて」というところ。「立つ」は自動詞四段（五段）活用、「立てる」は他動詞下一段活用。ところが「立つ」には古く「名をや立ちなん」（古今・四、後撰・二）などの用法があり、この他動詞四段活用の「立つ」が現代語に残存していると考えらるべきだろうか。

他にも、「腹を立ちやった」（歌行燈・二）、「今腹を立ったのも」（多情多恨・前編一）、「君、腹を立ったのか」（同上）など。本来、主格の「が」によって導かれる、可能表現の対象や、願望などの表現の対象が「を」で示されることがあるが、それとも違うようである。

なお、「片手を泳ぎ、片手で酒の香をかき分けるように入った」（歌行燈十）の「片手を泳ぎ」はどう解釈すべきだろうか。これは、「片手を泳がせ」といいたいところだが、松尾捨次郎氏は自動詞に他動詞の意味を含めたと見て、前掲の「あだの名を立つ」を「あだの名を立てて、名が立つ」と解しておられる。松下大三郎氏も大体同じような考えで、「自動性動詞でも臨時に他動性を帯びることがある」としておられる。

## よく出てくることば

(1) 「心持ちといたらない」など

8 私は夜が更けるまで寝ることができないから、その間の心持ちといったらない、……。

11 上 人とは別懇の間と見えて、連の私の居心のいいといったらない。

34 その姿の佳さというてはなかった。

29 夏のことで戸障子のしまりもせず、ことに一軒家、あけ開いたなり門というてもない。

8 は、「心持ちといったら形容すべきものがない」「……くらべるものがない」などの意。他の例についても、「ない」「なかった」の前に、「形容すべきもの」「くらべるもの」「それに相当するもの」という実体が自明の理として省かれているのである。

この用法は他の作品にも多い。

- お千世は那の人の孫なのよ。一可愛っぢやないのねえ。(日本橋二十八)
- あのまた、歩行ぶりといったらなかったよ。(外科室・下)
- 生煮えの臭さといったらなかった。(眉かくしの霊・二)
- 怯えた様子とてはなかったそうでございましてな。(同上・四)
- お色の白さとたらありません。(同上・六)
- 性来の無愛相が、憂に心を奪われているのであるから、柳之助の様というものは、無い！  
(多情多恨・前編一)

(2) 「おおうが否や」と「拝むと齊しく」など

53 馬の目をおおうが否や兎は躍って、仰向けざまに身をひるがえし、……。

76 拝むと齊しく……いっさんに駆け下りたが、……。

ともに、「……とすぐに」の意。「が否や」は普通「や否や」「と否や」の形であられる。「が否や」を使ったのは、「おおうや否や」は発音上母音が連結し発音しにくいので、わざとこのようにかえたものか。他の作品では「や否や」の形で用いている。

- 胴震いに立窺むや否や、……一度駆出したのを、……。(日本橋三十二)
- 一度ひったり聲を消すやいなや、けたたましい音を、すたんと、立てて……。 (眉かくしの霊・二)
- 検事代理を見るやいなや、渠は色蒼白めて……。 (義血俠血・七)
- 母といふ名を聞くやいなや女にははかに聞き耳立てて、……。 (夜行巡査・五)
- 赫と成った赤熊が、握拳を被ると齊しく、かんてらが飛んで、……。 (日本橋・三十二)
- その声を聞くとひとしく、白糸は背後より組みつかれぬ。(義血俠血・五)
- その最後の言を聞くと齊しく、……老人が押へたる肩を振り放し、……。 (夜行巡査・六)

これらの言い方は師、尾崎紅葉の「多恨多恨」その他にもよく出て来るもので、鏡花が知らず知らず師に習ったのであろうか。

(3) 「すれつもつれつ」など

67 件の鰐鮫の巖に、すれつ、もつれつ。

もとの顔も、胸も、乳も、手足もまったき姿となって、浮いつ沈みつ、パッと刻まれ、アツと見る間にまたあられる。

この語も他の作品に多い。

- 露を争ふ蝶一双、縦横上下に逐ひつ、逐はれつ、雫も滴さず翼も息めず、……。 (義血俠血・二)

- 芳草の間を出つ、入りつ、園内の公園なる池を繞りて、……。 (外科室・下)
- 手と手の間を抜けつ、潜りつ、前髪ばらりとこぼれたるが……。 (照葉狂言・五)  
これも師紅葉の作品に多出する。

(4) 助動詞「だ」の連体形「な」と形容動詞の連体形「……な」

① 「面妖な」など

13はて面妖なと思った。

18はれ大変な、……。

56はてさて迷惑な、こりや目の前で青色蛇の旨煮か、腹籠の猿の蒸焼か。

76助けられたが不思議なくらい、嬢さま別してのお情けじゃわ、生命冥加な、お若いの、きつと修行をなさっしゃりませ。

「よくな」「そくな」と同じように、気持の上で一旦文を終止するとき用いる。感動詞などとともに用い、感動的表現となることが多い。江戸語以来の用法。

② 「懇意な」など

「9 懇意な者」「12 厭な 壮俊・実体な 好い男」「14 異なる こと」「15 みごとな (根)」「21 黄色な 汁」「54 冥加至極な お給仕」「51 大粒な 齒」

このような用法は自然だが、「15人を凌いた仕打な薬売」というやや無理な使い方も見える。これなどまだ名詞としての性格の方が強い。

③ 「小犬ほどな」など

25このくらいな蛙……。

47このくらいな胸中の長虫……。

70外科なんと来た日にゃあ、鬢付へ水を垂らしてひやりと疵につけるくらいなところ。

45小犬ほどな鼠色の小坊主……。

16見上げるほどなあたり……。

29南瓜の蓆ほどな異形な者……。

この「くらい」「ほど」は程度をあらわす助詞であるが、体言に準ずる語として、それに助動詞「な」をつけて、程度・状態をあらわす形容動詞の連体形のように用いている。完全な形容動詞でない証拠に「な」のかわりに連体格助詞「の」におきかえても通用する。現に「25これほどのやつら」という用例もある。

④ 「そこな」

59そこな男女……。

51そこな御坊さま……。

この「な」は存在をあらわす助動詞。現代語では「そこな」という連体詞と考えることもできる。やや古めかしい、かたい、江戸語以来の言い方。従って59は老僧の、51は親仁のことばとして使われている。

(5) 「友だちを見たようで」など

38厭じゃないかね、お前たちと友だちを見たようで可愧しい、あれ、いけませんよ。

これは、旅の修行僧を連れて水浴に行く途中の魔性の女が、道で墓(実は魔術で変身させられた男)にからみつかれて、僧の手前体裁をつくらったときのことばである。

18 乞食を見たような者じゃというて、人命にかかわりはねえ、……。

36 鉄挺を見たような拳で、背中をどんとくわした。

江戸語では次のような例がある。

◦ にしめ大豆山椒の皮などはさむは、色町を見たやうに思はれてしほらしければ、……。 (好色一代女五ノ二)

◦ 此の木くらげを見たやうな物もこりゃ謂れもなく付いて居るのではない。(志都の岩屋講本・下)

◦ 売薬屋の銅人形見たやうに看板にされたばかり……。 (浮世風呂三下)

これは「……を見たやうだ」→「……みたやうだ」→「……みたいだ」という変化をたどった語で、最初は「動詞+完了の助動詞+比況の助動詞」であった。鏡花が「を」を伴わずに用いた例は、

22 大鳥の卵みたやうなものなんぞ足許にごろごろしている……。

◦ こんな怪物屋敷見たやうな処へ……。 (日本橋十七)

(6) 「それなりけり」

28 なんの渡りかけて壊れたらそれなりけり。

「それなり」の「なり」を助動詞のようにとって「けり」を添えてできた語。「そのまま過ごした」「そのままにすんでしまった」「それきりだった」などの意。

◦ 北海道へ渡ったという音信が<sup>おとずれ</sup>あって、それなりけり。(湯島詣二十)

江戸時代の用例に、

◦ 其なりけりに十七の春を過しぬ。(男色大鑑四の二)

◦ 夫なりけりにはして置まい。(菅原伝授手習鑑・一)

◦ 内鯨舎でも揚げようといふ場だが、それなりけりで済まして……。 (浮世床二上)

◦ 上がたさ<sup>かみ</sup>へかせぎ<sup>ゆく</sup>に行とって出たなりけりで、かへらぬとおもひなさろ。(東海道中膝栗毛後編)

—未 完—